

チャペル週報

一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に
苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部
分が共に喜ぶのです。

(コリントの信徒への手紙一 12:26)



秋季宗教運動特集号
2009.10.12~10.16 No.17
関西学院宗教センター

☆チャペル・スケジュール☆

時間 10:35～11:05 場所 各学部チャペル

10月12日(月) 神 松 本 あずさ (神4)
経 舟 木 讓 (宗教主事)
人 辻 学 (広島大学大学院教授)
短大 聖書物語「ミリヤムのうた」

10月13日(火) 神 成 岡 宏 晃 (M1)
文 藤 原 一二三 (教育学部非常勤講師)
社 チャペル・メデイテーション
法 ヴォランテニアの勧め 上ヶ原ハビタット
経 Timothy Dale Boyle (宣教師)
商 山 本 俊 正 (宗教主事)
教 田 淵 結 (宗教主事)
総 ハビタットサイクリング 総合政策学部学生

10月14日(水) 神 能 勢 岳 史 (M2)
社 山 野 仁 美 (人間福祉研究科M2)
法 } 法学部・経済学部合同音楽チャペル
経 } 場所：法学部チャペル
商 平 林 孝 裕 (神学部教授)
人 孫 良 (人間福祉学部准教授)
理 「風を知る」永 田 雄次郎 (文学部教授)
総 ハンドベルクワイア演奏 (上ヶ原)
短大 金山ゼミ

10月15日(木) 大学合同チャペル (西宮上ヶ原) 10:20-11:20
「ナンバーワンよりオンリーワン…でいいの?」:本田哲郎(フランシスコ会神父)
於：中央講堂
大学合同チャペル (西宮聖和) 10:20-11:20
「一期一会“I”と“Mimi”と“私”」:津村樹理(聖和大学卒業生)
於：6号館611教室
大学合同チャペル (神戸三田) 10:20-11:20
「一人ひとりの人生の目標」:Ruth M. Grubel(院長)
於：Ⅵ号館101教室
短大 ネパール文化交流旅行報告

10月16日(金) 大学合同チャペル (西宮上ヶ原) 10:20-11:20
「愛する」権利:堀江有里(ECQA代表、日本基督教団牧師)
於：中央講堂
大学合同チャペル (西宮聖和) 10:20-11:20
「一人ひとりの人生の目標」:Ruth M. Grubel(院長)
於：6号館611教室
大学合同チャペル (神戸三田) 10:20-11:20
「外国人いらっしゃい!」:今泉信宏(宗教主事)
於：Ⅵ号館101教室

- ◇ランパス早天祈祷会 毎金曜日 午前8:20～8:40 於：ランパス記念礼拝堂(上ヶ原)
10月15日(木) 秋季宗教運動のために 永 田 雄次郎
10月16日(金) 理工学部のために 高 橋 功
◇総合政策学部早天祈祷会 毎木曜日 午前8:40～ 於：宗教主事室
-

Seeking your Life Mission

Ruth M. Grubel

When I speak with young people about their dreams for the future, many are unsure of what they want to be or do. Especially during job-hunting, students find that self-analysis (自己分析) is very difficult, and then locating a job that fits one's goals can be even more challenging. Sometimes, even adults who graduated from university many years ago will say, "I don't know what I should do with my life."

Our school's mission statement includes the words, "Kwansei Gakuin ... inspires its members to seek their life missions," and this is an important ideal for our learning community, which includes people of many ages, both women and men, those with different sexual orientations, nationalities, religions, physical abilities, and types of wealth. I believe that all persons have unique, God-given gifts, which are influenced by their surroundings and choices that they make. Therefore, we cannot assume that everyone has the same needs and aspirations. Instead, by encouraging self-discovery and self-development, I hope that our community can truly appreciate and enjoy the diversity that enriches our culture, both here at school and in society.

Diversity within a community is not just a concept to make life interesting. As we face our daily tasks and try to address problems through classes, research, and organizational management, the contributions by members who have a variety of perspectives will enrich our alternatives and lead us to more satisfying conclusions. If everyone has the same educational and cultural experience, it may be easier to work together, but such a community would exclude many people living in Japan, and we will be less able to respond creatively to social problems.

Finding one's life mission may not be easy, but by taking a variety of classes, attending chapel, talking with friends and teachers, and participating in various activities, including volunteer work, and maybe even study abroad, a student can learn a great deal about himself or herself.

At Kwansei Gakuin, we still have to improve support for "mission-seeking" by members with disabilities, those with young children or family members who need special care, and those whose native language is not Japanese, just to give a few examples. However, in our ideals for the University, Kwansei Gakuin has identified "the creation of a community 'without fences'" as our goal; an inclusive community where differences do not become barriers, but are sources of strength and creativity.

As our motto, "Mastery for Service" implies, it is only when we master our own gifts and abilities that we are best able to serve one another. I pray that your life at Kwansei Gakuin will nurture you in your preparation for a life mission, and that you will find joy in supporting others in their journeys.

(院長)

「性＝生」の“多様性”を生きること

堀 江 有 里

「みんなちがって、みんないい」——あるお寺の本山門前に掲げられた看板のフレーズが、一時期、話題になりました。人間はそれぞれみんな、ちがう。顔もちがえば、名前もちがうし、育ってきた環境もちがう。感じ方もちがえば、生き方もちがう。そして、ちがいがあからこそすばらしい。モノトーンの世界よりは、カラフルな世界のほうがオモシロイ。多様な生き方、それぞれの個性をおたがいに尊重しあえることは、すてきなことだと思います。

もちろん、仏教だけではなく、キリスト教も、そんな多様な人間のあり方を肯定してきた側面もあります。それぞれがみんな、神から与えられた大切ないのちである、と。だから、おたがいに尊重しあえるように、と。それを「愛」と表現してきた歴史があります。しかし、そのような「愛」を一方では強調しながらも、そのキリスト教が、他方では多くのいのちを否定し、殺してきたことも事実です。

「性」にかかわる問題もそのひとつです。世の中には「男」と「女」がいて、一対一でつがい、「家族」をつくっていくことを、キリスト教は「結婚」というかたちで祝福してきたという歴史をもっています。しかし、祝福という“光”が当たる生き方もあれば、その背後には、かならず“闇”がつくられていきます。そして、そこで排除されたり、抹消されたりする「性」があります。それはその人の「生」そのものを否定していく事柄です。

わたしは牧師として、レズビアン（女性同性愛者）として、1994年から、同性愛者のピア・サポートをはじめました。15年が経ちました。その歳月のあいだには、この世から去っていった人たちも少なからずいます。なぜ、こんなにも生きがたい社会のなかに、わたしたちはいるのだろうか。——そんな素朴な疑問をわたしはもっています。この10年あまりで日本社会の状況も（表面上は）大きく変化したように思えます。たとえば、マスメディアに（男性）同性愛者が登場し、また、身体と性自認のあいだに違和感を抱える人々が「性同一性障害」として取り上げられるようになりました。そして、徐々に、「性＝生の多様性」が叫ばれはじめられています。しかし、この現代日本にあっても、やはり、先の疑問は拭い去れないままに、わたしの心の奥底にありつづけています。

「多様性」を認め合って生きるというのは、案外、むずかしい。しかし、嘆いているだけでは何もはじまりません。実際に、活動を通して、わたしがこれまでに経験してきたことは、むずかしさが横たわっていたとしても、人と人が出会っていきことができる可能性がある、ということです。否定的な側面だけを挙げれば、とすると、後ろ向きに映ってしまうかもしれませんが、“闇”に置かれた存在は、またほかの“闇”に置かれた人々と結び合っていくことができますし、そこから生き延びる力を紡ぎだしていくこともできるわけです。

いろんな人たちがいれば、それだけ価値観がぶつかりあい、誰かの生き方を認めようとすれば、ほかの誰かの生き方が否定されてしまうこともあります。そこで折り合いをつけることはなかなか困難なことかもしれません。でも、まずは、日常のなかで、それぞれが“ちがう”存在だということに気づき、そこから出発してみる——抽象的なことではなく、具体的な〈あなた〉と〈わたし〉の出会いのなかで、ぶつかり合い、対話がはじまっていく瞬間に、わたしは大きな可能性を見出し続けたいと思っています。

（日本基督教団・牧師）

排他から受容へ

今 泉 信 宏

皆さんは「単一民族」という言葉を聞いたことがあるでしょう。これは日本社会構造を象徴する言葉のみならず、日本人の生き方そのものでもあるのです。英語の言葉にxenophobia（ゼイノフォビアと読みます）というのがあります。これは外国人を嫌う、排除する（アメリカの歴史の大きな部分でもある）という意味です。日本は日本人のためだけのもの。このような考えを持った人がまだまだ多くいるのです。日本は決して「単一民族」社会ではありません。アメリカの原住民である、ネイティブアメリカンもそうですが、日本にもアイヌ民族が長年住みついていた。それを野蛮ということで排除し排斥してきたのです。今日、日本には200万以上の外国人が居住しています。そして日本人のやりたがらない、低所得で危険な仕事に従事しています。子どもたちは学校へ行くと文化、習慣、作法、またお弁当などが違うということではじめられています。こういうことを皆さんはご存知でしょうか？

日本の社会は周知のごとく少子、高齢化が同時進行しています。2054年までに何と日本の人口は1億を切るとまで言われています。ということは、日本人だけでは労働は回らなくなります。外国人の労働力なしには、日本社会は動かなくなるのです。その時点で外国人にいらっしゃいと言っても、はたして来てくれるであろうか？今学校でいじめられている子どもたちが成人しているところです。日本での苦い経験を思い浮かべて、日本にはもう2度と行きたくないと思えるかもしれません。つまり現在日本にいる外国人をわれわれ同様に扱っていくことが大切なことなのです。日本人でも就職が困難な時、外国人のことなんか考える余裕なんかはないという考えが主流かもしれない。しかし数十年先のことを鑑みれば、現在の日本居住の外国人を日本人同様にしていかなければ、日本の未来事態が危ういことを理解すべきであろう。

「多様性」という概念や生き方は日本では定着していない。現代のアメリカでの流行語はdiversity=double belongingです。一方だけではなく、両方につながっていることがdiversity（多様性）を身につけることである。わたし自身アメリカと日本が自分の中で息づいています。それが私を私らしくしているのです。一人一人がこのdouble-belongingを身につけるのにどうすればいいのかを考えつつ生きていくことが求められている今日ではないでしょうか。

(総合政策学部宗教主事)

私の出逢った風景から

津 村 樹 理

「Vipi?Juri! (=「ジュリ! どう? 元気?）」市場へ行く途中、さっそく私を見つけた誰かが、遠くの方から私に向かって手を振っている。

「Poal!Poal! (=「元気! 元気!!)」と私も笑顔と大きな声で手を振り返す。

今日も村の人が“私”を見付けては親しく声をかけてくれる。自宅から市場まで本来ならば30分の道のりを、こうして私は“私”を見付けて声をかけてくれる、おしゃべりで陽気な人々と共に、1時間かけてやっと市場に辿り着く、そんな私の日常風景。ただ、これが日常に至るまでには、彼らと私の長い期間をかけたやり取りがあった。

私の住んでいた地域では、多民族、多宗教、多言語で、私の周りには主に、キリスト教とイスラム教、そしてその地域の土着宗教を信じる人が多くいた。同じ地に住みながらも出身の国や部族自体が違う事も少なくなかった。ただ皆、肌の色は似ていた。そんな中に私がひょっこりやって来た。彼らの記憶によると、この地域に初めて生活する日本人、いやアジア人である。

初めて見る明らかに異質な存在だった私は、新しく珍しい物事を好む彼らにとって格好のネタになった。狭すぎないが決して広くはないこの村で、噂はすぐに広まった。「Mchina!!HiHoo! (=中国人!）」等と、からかいかにも似た呼びかけの毎日にうんざりし、一言も口を利かない時もあれば幾度となく喧嘩もしたし、ひどい冷やかashiをする人を捉まえてはいちいち自分の説明や話をした事もあった。家から一歩も出なかった時もあるが、それも長くは続けられない。私にも生活があり、生きていく為の水や食料を手に入れなければならないし、何より私が半日も外へ出なければ近所の人や子ども達が放っておいてくれるはずもなかった。

辺りをひたすら歩きまわる私に相変わらず“Mchina”の呼びかけはあったが、近所の子ども達と遊ぶ機会が増えた。泣き叫び逃げられた事もあったが、自然と関わる機会が増えた。言葉の幼い者同士、言葉のみでお互い難しく理解する事はなかったが、“一緒に遊んでも大丈夫な人”と知ってくれたようだった。ある日、仕立て屋から嬉しそうに私の名を呼ぶ声が聞こえた。近所の子どもとその家族だった。家族の方とは話をするのがその時がほぼ初めてだったが、普段子どもと関わる私を見て“子どもと遊ぶ人”と認識されていたらしい。その内に近所の人や以前に喧嘩をした人等、私の名を呼ぶ人が増え始めた。

ある地域にはモスクの数軒隣に教会があり、夜も明けぬうちからコーランが響き渡り人々の朝が始まる。教会では曜日に関わらず晩くまで、大音量で音楽や歌、踊りを楽しみ夜を迎える。数少ない金物屋はラマダンの為店を閉め、マサイ族の人がキリスト教徒の店で油を買い、ラマダン中のイスラム教徒とお茶をすすするキリスト教徒の教員達が、共に休憩中のお喋りを楽しむ。当初、私はこのような彼らの日常の人々の姿や風景が不思議でならず、正直戸惑いの連続だった。各々の習慣は違えど誰も抗議しないし、これが彼らの生活の一部なのだ。

村の中で私が、“Mchina”でなく、“Mjapani (=日本人)”でもなく“Juri”になり始めた頃、市場のおじさんに言われた。「普段の生活の中で、この人は○△で、あの人は△△で…と考えて知り合いと接しているか？それを、いちいち意識して人と話したり買い物したりできるか？俺らもお前も同じ村（国）の人間だろう？」

その瞬間、私ははっと気付かされ、恥ずかしさをも憶えた。彼らにとって“Mchina”は私への呼びかけの一つに過ぎず、私の国籍も職業も外見も、何でも構わなかったのだ。彼らは私を知ろうとし、私も彼らに近づこうとしながらも大切な部分に気付いていなかった。共に生きる中で、共存する中で、人を区別して関わったり話そうとすると、本当の人の交わりは持てないよ、真の対話はできないよ、彼らやこの村に、そう教えられた気がした。そして自身の中にあった、自分でも気付かなかった彼らに対する心の壁、いつの間にか引いていた隔ての線を見透かされていたような気分だった。

私の尊敬するタンザニアの老師がよく口にし教えてくれた“Milima haikutani. Lakini binadamu hukutana.”という言葉。スワヒリ語の諺で“山と山とは出会えないが、人と人とは出会う”という意味だ。

そう、私達は出逢ってしまった。あの地を自分の足で踏みしめたその瞬間が私の一期一会であり、今となっては私の故郷の一つである。“多様”と辞書で引くと“色々な種類がある様子”とあった。私達の周りには各々の自分の居場所や自分の知る世界がある。しかしそれはほんの一部にすぎない。自分の知っている世界や今居る所が全てではなく、ほんの一部である事を、心に留めておく必要があるという事に気付かされる。又、それは遠く離れた場所の事ではなく、自分達の身近な所にあるという事も忘れてはならない。自分を含めた身の回りでも、皆同じように見えるが皆違うという事に目を向けていきたい。私達はこれからも数え切れないほどの出会いが待っている事だろう。“違うもの”と“違うもの”が出会った時、私達は何を考え、どうするのか。

そして私は、マサイの友人に髪を編んでもらう。仲の良い彼女のいつもの場所である、道端のマンゴーの木の下に一緒に座り込む。通り行く多くの人々に見られ時には囲まれながらも、もう冷やかしの声をかける者はいない。私の髪で両手がふさがっている彼女の商売の手伝いをしながら行き行くお客さんを相手に、村の人とお喋りも楽しめるようになった。私は彼らやこの村の風景に少しでもとけ込めるようになったかな、とふと考える。

私があのか村の中で“China”から“Juri”に変わった瞬間、彼らだけではなくそれ以上に、私の中で何かが大きく変わった事を確信した。村に対して、彼らに対して必死に戦っていたあの頃、実は私は“私自身”と闘っていたのかもしれない。

(聖和大学教育学部 卒業生)

●**夕べの祈り～テゼの音楽を用いて～**

と き：10月16日(金)18:30～20:00

ところ：西宮上ヶ原ランバス記念礼拝堂

●**ビッグイシュー基金共同企画写真展&トークセッション**

「写真が伝える路上生活 ーストリートを生きる人びと」

人権教育研究室と、路上生活者の自立支援を目指す「ビッグイシュー基金」は共同企画として「写真展」とトークセッションを開催します。撮る側／撮られる側という従来の境界を越えたところに成立する独自の「写真」プロジェクトを通じて路上生活をめぐるリアリティについて考えます。

と き：

<写真展> 10月19日(月)午後1時から10月23日(金)の午後5時まで

20日(火)から22日(木)の3日間は午前9時から午後10時まで。

<トークセッション> 10月23日(金)午後3時15分～6時30分

ところ：

<写真展> 関西学院大学図書館エントランスホール (1階)

<トークセッション> 関西学院大学図書館ホール (地階)

トーカー：佐野章二(ビッグイシュー代表)、高松英昭(写真家)、カメラマン=販売員
ナビゲータ：阿部潔(関西学院大学)

主 催：関西学院大学人権教育研究室

●**ランバスチャペルアワー**

学生たちが企画するチャペルです。秋学期の予定は以下のとおりです。

10月20日(火)、11月17日(火)、12月15日(火)

いずれもランバス記念礼拝堂(上ヶ原)にて10:35～11:05

●**大阪梅田キャンパスチャペル**

阪急梅田駅から徒歩すぐ、アプローチタワー14階の大阪梅田キャンパスではチャペルアワーを開催しています。

10月16日(金) 山本俊正(商学部宗教主事)

10月23日(金) アンドレアス・ルスターホルツ(文学部宗教主事)

10月30日(金) 樋口進(宗教センター宗教主事)

いずれも18:00～18:20

●**盲導犬育成のためご協力をお願いします**

関西学院宗教活動委員会は、目の不自由な方々の社会参加促進を願い、社会福祉法人「日本ライトハウス」の募金活動に協力しています。吉岡記念館事務室はじめ募金箱を用意しておりますので皆様の温かいご協力をお願いいたします。

●**書籍刊行のご案内**

『キリスト教平和学事典』(2009年9月25日刊行)

関西学院大学キリスト教と文化研究センター編、教文館

紛争、テロリズム、環境破壊、経済格差、差別問題、人権侵害、生命倫理問題——現代世界が直面する平和の諸問題をキリスト教の視点から分析し、キリスト者やキリスト教会が取り組むべき課題にどう対処していくかの理論と実践を解明。平和構築に向けた総合理解を試みる画期的な事典。全144項目、各界から86名の寄稿。

<特長> キリスト教の視点による日本初の平和学事典。

・平和学研究・平和運動の第一人者を迎えた多彩な執筆陣。

・各テーマを掘り下げた大項目が中心で読み応えある記述。

・表・図版・写真など、ビジュアル資料約50点収録。

・付録に関連年表および人名索引・事項索引を掲載。

【A5判/448頁/定価8400円】 [ISBN 978-4-7642-4034-6 C3516]